

希望 21

自治 共生 平和

ありふれたことだけどかけがえのない希望がここにある

月刊

Jul.1996

創
刊
10
号

1部 200YEN

定期購読 1年 3,000YEN

〒228 神奈川県相模原市上鶴間

2973-3-110

TEL/FAX 0427-40-4794

郵便振替; 00100-1-97125

今、『反戦』の真価を問う

いま、私たち自身の『反戦』の真価を問う意味を込めて、この4月の「日米安保再定義」の意味を、もう一度振り返っておきたいと思います。再定義の内容が、「米国が自国の利害のためにアジアでの軍事的プレゼンスを確保する、日本はその強固な支えとなる」ことを宣言しただけなら、これまでの日米安保の内容を追認したにすぎません。それはそのとおり。そしてそれ以上の意味があるのではないのでしょうか。

「湾岸戦争」しかりですが、知っての通り、戦争というものには巨大な費用がかかります。そしてまた、巨大なシステムとして動く現代の戦争は、あらかじめ用意されていないシナリオに対してとても脆弱です。だから、もし戦争になればどのような戦争になるかを、あらかじめ用意し、不測の事態が最悪のシナリオを走り出さないように、あらゆる可能性が予測したシナリオの一つに流れ込む、その条件を創り出すことに、戦略家たちは躍起になっています。「安保再定義」は、このシナリオの確定に絡む重大な選択、後戻りできない選択であったのではないのでしょうか。

「安保再定義」に奔走したナイ・イニシャティブの、日本の政治に対する大きな危惧は、特に軍事的には、国連中心主義でした。「湾岸戦争」後国際化する日本の軍事は、例えば防衛官僚が独自の国際情報ネットワークの整備をめざすなど、これ以上ほうっておけないところまで来たからです。これは対中国、対アジアむけの、米国のリップ・サービスばかりではないでしょう。



1978年、日米両政府がガイドラインと呼ばれる日米防衛協力の約束を取り交わして以降、日本はまたたく間に、核の発射基地へと作り替えられていきました。それでも、対ソ戦を軸にしたそのシナリオにそって、米海軍が「ネイビー・イズ・レディー（海軍の準備は整いました）」と議会報告するまで、約10年かかっています。アメリカは必死だったのです。しかし今、そのシナリオは役割を終え、もう使えません。それで、今また必死になったのだのでしょうか。

日本が、「安保再定義」をこれほどすんなりと受け入れてしまったことに、米国は驚きを隠していません。日本の政治・軍事官僚と、米国の彼らとの、大きな認識のギャップを感じます。問題なのは、「国連協力という形抜きにでも」「単一の合衆国との同盟関係に依拠して」、世界規模の特にアジアにおける戦争の用意があると言いつけるかどうかなのです。そこには、原理的に、国連も含めて世界を敵にまわしてもということが含意されています。だからこそ、米国は、自国の国

(次ページへつづく)



(前ページからのつづき)

防計画を自国の議会へ報告するより前に、日本（日本だけではありませんが）に対して事前に打診してくるという念の入れようでした。ことの重大さに、日本政府はまだ気付いていないようです。むしろ、自分もこれで大国と認められた証拠かと、気を良くしているというのが実態じゃないでしょうか。このおめでたさは、ほんとに最悪です。

これは、アメリカなり日本なりが世界に対して、つまり世界戦争を起こしたがつているという水準の問題ではありません。世界戦争という物言いをするならば、有り体に言えば、今が世界戦争の真っ只中という方が適切ではないでしょうか。というか、世界の圧倒的多数の人々にとって、戦争はあまりにも日常的で、身近なものだからです。平和を求める私たちにとって大切なのは、この戦争の真っ只中で、人々がともにどう平和の領域を創り出しそれを広げていくのかということに尽きます。日本の私たちも、その足場にしっかり立ち切りたいと思うのです。

「戦争」はもはや、「やあやあ我こそは……」と名乗り合うようなものでも、国同士の宣戦布告から始まるようなものでもなくなっています。「戦争」とすら呼ばれない。「湾岸戦争」の時、それはあくまで懲罰であって、アメリカは一度も戦争とは言いませんでした。

そして、「戦争」と「政治」の区別は、ますます曖昧なものになり、境目の無い、敷居の低いものになっていると思います。「戦争」は「政治」の最後の延長ではなく、もうちょっと手軽に、かなり好き勝手に、大国にとって計算可能なリスクという意味で使いうる手段になっているということが、認識できます。それは最後のやむを得ない手段ではなく、選択可能な、選択肢の一つなのです。そして、戦争の様々な形が、カタログのように用意されている。勝者も敗者も無いというのは、すでに核戦争だけではないようです。



例えば、朝鮮半島の統一に向かうプロセスにおいて、戦争がどのように実在しているかといえば、誰かがそれを起こそうとしているかどうかということよりむしろ、統一プロセスの政治的要素の中に、戦争という要素が（つまり可能な選択肢として）すでに組み込まれている。民衆の統一プロセスへのイニシヤティブは、その大きな条件の中で制約を受けつつけている。戦争の要素は、そういう形で機能する。そして、そのように機能する戦争の平時と戦時の区別は、きわめて曖昧なものになっているというのが今の時代の特徴でしょうか。そのなかで、平和もまた、理念と言うより、政治的力を持たなければ意味を持たない時代にますますなっていると思います。

平和が政治的力を持つために、私たちは軍事的プレゼンス一般よりも、その戦争の「シナリオ」からしっかりと目を離さずにおきたいと思います。たとえ今すぐこの地上から武器を一掃できないにしても、私たちの力でこの「シナリオ」を絵に描いた餅のように無力にすることは、今すぐにも可能なことだと思います。政治的とは、何々条約を粉碎するとかいうこと以上のものです。例えば自覚的な朝鮮・韓国の人がとなりの日本人とよりよい関係を求めるのは、好ききらいの問題ではないはず。それは、平和を確保し自分たちの自由の領域を広げる、優れて政治的な選択です。日本人の側で、それはどれほど自覚されてきていたでしょうか。私たちが自分たちの政治を取り戻す、その第一歩です。

私たちは、私たちの身の回りから、地域から、しっかりと地に足のついた反戦・平和の声をあげていこうと訴え続けてきました。そしてその闘いの道筋は、私たちが自分たちの政治・民主主義を取り戻す道筋とひとつのものです。いや、そのことが、今、切実に求められているのだと思います。

もっと大胆に、もっと着実に、平和に向けた人々のイニシヤティブをともに創っていきましょう。

いま、この人にきく 岩波初美さん

(鎌ヶ谷市議会議員)

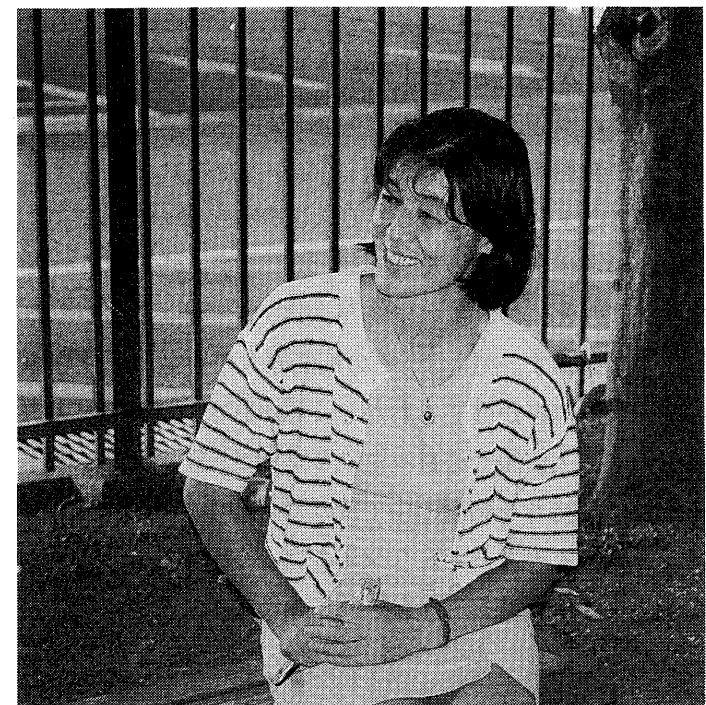
**ゼロから作る！仲間を作る！
組織を作る！社会を作る！**

近隣の市川市や松戸市に比べ、市民運動が弱いと言われている鎌ヶ谷市。市議会も停滞気味で、その中で孤軍奮闘している岩波さん。超党派の全国若手市議会議員の会の会員でもあり、今後アジアの地方議員たちとの交流も考えているそうです。(インタビュー・まとめ 篠崎史範)

◇生協で働いて一番学んだのは、何もないところから作るということ

学生の頃、近所の重度の肢体不自由の障害者の介護をやっていました。当時は座敷牢とか言われていた時代で、重い障害を持った人達は表に出さず、その人達が地域で暮らすというのが今ほど一般的な話題ではありませんでした。ある時その人が元いた施設と一緒にいく機会があったのですが、人が人として暮らすというのはほど遠く、女性は介護に手が掛かるということで子宮を摘出させられていたり、街の有力者が来てみんなまとめて何とかさんに入れて下さいよと言ってまとまった票が動いたり、それ以上に私の想像できない様な境遇におかれていた。私が障害者の人達の役に立とうと思っていた甘い考えはその場で崩れ、結局、今はこの人たちを受け入れていく社会ではないんだということに気がつきました。一方で、障害者がどう生きるかということばかり考え、自分がどう生きるかということについては忘れていました。自分の考えややりたいことを捨てて相手に合わせていくことが、ちょっとおかしいなと思っていましたので、それをきっかけに介護をやめました。「あなたも生きる、私も生きる」それが大事だと思えたんです。

当時はメジャーじゃなかったけれども、生活協同組合が環境問題などに取り組んでいることが雑誌等で少し紹介



されてきました。言っていることとやっていることが一致するところで働きたかったのも、そこでなら働けるかもしれないと思い、結局約10年働きました。そこで一番学んだのは、何もないところから作るということです。生協は人が動いてものを作って行くところで、資源は人的資源のみ。物を配送するというイメージが強いですが、どちらかといえば「社会の仕組みを作っていこう、地域の中の人間関係を築いていこう、自分たちの願っているつながりを作っていこう。」というのが主要な目的です。何もないところから、1000人の仲間を作ったり、その1000人の仲間のやれることを起こしたり、何もないところからものを作っていくというのを実感した。人が人をどんな風に説得して共感していくか、共感した人がその先どんな風につながっていくか目の前で見せてもらえました。

◇選挙はこれから自分が取り組むことの仲間を作っていく活動です

生協の活動を見てきたことで、最初の選挙の時自分が出会いのない所から出発しても、3か月間かけてこんな風に組み立てていけば、最後には成功するのではないかと思うことができた。それは、会った人は必ず説得していこう、行って説得して私の考えに必ず共感してもらおう、ということ。3か月間、毎日毎日費やして人と会い、今日会

った人には必ず誰かを紹介してもらい、「今日はどこまで話ができたら良かった」とか、「できなかったから明日はもっとこうしよう」とか、「今日は何人に会おう、明日は何人に会おう」と、誰にも言わなかったけれども自分では決めていました。大体500人位の人と会いました。

いわゆる選挙期間の1週間は、既に選挙は終わっていてセレモニーと言われていますが、この1週間はこれからのために使います。例えば、その期間は大手を振って見も知らない人に声をかけてもおかしく思われない時期です。ポスターに個人演説会の日程を刷り込んで、誰でも見に来てよと言う気持ちを制度の中で投げかける事ができます。投げかけをしてみたらどんな反応があるか楽しみで、実際何人かの人に来てくれて十分満足できました。この1週間は、これから自分が一緒にやってくれる人を捜す1週間です。住民の感覚を肌で感じていく期間でもあります。2期目の選挙の時は、自転車を使わず歩きました。朝公園で小さい子どもを連れている若い女性達の前で、「演説しますので聞いて下さい」と言ってハンドマイクでやってみるんですけども、そのときにどんな表情で聞いてくれるのかなど実感することができます。そんなとき手なんかたたいてくれて、すごく嬉しいなど思いながら帰ります。エネルギーをもらいながら帰る。

自分の意志をちゃんと反映できる形で選挙に取り組むということは、これから自分が取り組んでいくことの仲間を作っていく活動に他ならない。票を取るのではなくて、仲間を掘り起こすための非日常的活動が選挙活動です。

今議員としてやっているかなりの部分は、それぞれの人の意志がどんなところにあるかを知って、その人達が自分の自己実現をしたり納得できる仕組みを作っていくときに、それぞれの意思を確認しながら、こういう形で作っていくかという事です。それが自分の役割だという気持ちが強い。それは生協の時代と同じことをやっている。今の活動を通して自分と一緒にやりながら、それぞれがそれぞれのところでまた新たに枝を伸ばしていってもらうことが何より大事です。すぐに結論が出たり結果が出たりはしないけれど、重ねてきたものは人のつながり、人間同士のつながりとして広がってきているし、意図してやってきたことは成果として出てきていると思います。

◇非営利組織を起こしていくことに力を入れていきたい

各自治体の女性政策や北京女性会議、総理府が進めている男女平等への取り組みの中でも、女性が自己実現できる力をつけようというのが繰り返し謳われています。保護されたり援助されたりするのではなく、きちんと女性が力をつけて男女平等を勝ちとろう、そういう社会を作ろうとたわわとわわと、そこが重要視されているし、私も強くそう思う。最も必要でかつ基本的なことは、夫の収入の中で暮らしていくのではなく、社会のために自分の能力を生かしていく労働というものを自分なりに作っていくこと、すなわち自己実現をしていくことで、それがなければお話になりません。

生協はリーダー層を男性がやっていて下働きを女性がやっているという批判も受けていますが、女性がそこに関わることでそこが学習の場になっているのは事実です。その中から「働き方を自分たちで考えよう」とか、「時給いくらで働くだけではなく、自分たちの必要なところで事業を興して、雇われない働き方を起こしていきましょう」といくつかの事業体がぼつりぼつり出てきています。

ワーカーズコレクティブ、日本語では労働者同業組合と言われていますが、そこに関与するそれぞれの人が経営者であり、労働者でもある組織です。決して順調な歩みではありませんが、試行錯誤しながらやっている人達は結構元気。今まで仕事を興した経験もなく、自分名義の財産もない人達が中心で、時給もすぐには高いものが払えないなど苦勞していますが、高いハードルを一步越え、社会に対して存在を作っていくようにしています。営利にとらわれず非営利でいいんじゃないか、自分たちが納得して働いて、それに伴う報酬を受けていける職を作っていくようにしています。

そういった強者でない人達が、きちんと仕事をできるものを作っていくというのが今の私の課題。現在意志を同じくする仲間と、実績のあるところの話の聞いたり、勉強をしたり、ワーカーズコレクティブだけにとらわれず中小事業者のための通産省の支援組織に相談に行くなどしています。自分の住んでいるところでまだ事業化されていないけれども、必要なものを仕事として組み立てていき、形になるようにしていこうと考えています。

◇民間の意志のある人に自治体が助成をしていく転換期です

議員として自治体をみていると、役所が行っている福祉施設の事業コストは人件費、運営費も含めて民間の3倍はかかっている。3倍かかっていると言うことは、同じ経費を民間の助成策に振り替えて行けば3倍の人がサービスを受けられるということです。

役所は自分でやっている施設にはお金も使い、広く宣伝もします。しかし、公費で行うことは広く市民の活動を支えるものになって欲しいと思う。市民の意志で起こって

る活動をちゃんと支え、運営をし続けられるだけの助成を出し、民間でできないところをあえて非営利で起こそうと言うところには生命維持できるだけの補助を税金で補って行かなくては続いていきません。それをあまりきちんと正面から取り上げてくれないところにいらだちを感じています。市が、直営の施設だけをやっていけばいいと言うことではなく、財政力の範囲で必要な人にサービスを与えるために、民間の多くの組織に助成を与え、直営をやめてその浮いた分の経費を民間に分けていくという転換期なのではないか。一昔前の直営の方が安心できるというのはもうやっていけなくなっています。

(突如企画)みんなのコラム~今月の「ちょっと言わせて」

読者のみなさんの投稿意欲をそそるために、今回から試しに、不定期で「みんなのコラム」をはじめてみようかなと思います。最近気になってることとか、みんなに教えてあげたいこと、他の読者の人にもってほしい相談ごととか、なんでも投稿してきて下さい。8ページに書いてある、希望21の連絡先のどこでもいいので、お手紙、FAXどしどしお寄せ下さいね。一応、「みんなのコラムにのせてね」と書いて下さい。というわけで、第1回目は投稿がないので、私・菅原ニヨキが書かさせていただきます。

携帯電話・PHSでハッピーな通信ライフはエンジョイできるのか?

最近街では、携帯電話とかPHSとか持っている人多いですよね。私もアナログ時代に仕事で携帯持ってたことあるんですけど、あれは確かにあれば便利ですよ。忙しい人はね。しかも最近、たばこやさんなんかの赤電話がなくなってきちゃってるんで、公衆電話の数が減ったような気がするんですけど気のせいかな?そんなわけで、いつでもどこでもかけられる携帯・PHSが大流行なわけだけど、いろんな問題点も指摘されてきてますよね。

まず一つは、車の運転中に使うもので、交通事故の原因になるってこと。だから、運転中は使わないように規制しようという動きもあるんですけど、私に言わせれば、運転中かけられなかったら携帯電話の意味ないですね。営業努力の必要な弱小企業なんかは、事務所になれもなくなっちゃうこ

とが多いわけだし、移動中がホント重要な打ち合わせ時間になるんですよね。これだけ携帯が普及しちゃうと、持ってないとビジネスチャンス逃しちゃうんじゃないかとかの恐怖もあるよね。そんなに働かなくてもいいじゃないという声もあるでしょうが、それだけ働いてやっとな生活費捻出できるぐらいの人も多いよ実際。

あと、あまりの普及の早さにステーション機能がついてこれなくて、つながりにくくなるって言うじゃないですか。これは困る。だったら、そんなに急いで普及させるなよ、といいたくなりますが、量販店なんかじゃ無料でPHS配ってたりしますよね。私は、今はさっき言った会社は辞めて商店街で働いてるんですけど、「この商店街の方に特別にPHS無料で差し上げてます」なんてセールスきますもん。セールスの人も過剰競争にさらされてか、可哀相になるくらい必死ですよ。でもこれじゃあ普及するわけだと納得。でもそのおかげで通話しにくくな

るとい矛盾。

あとこれは問題かどうか分かんないけど、仕事の合間に見ているワイドショーによると子ギャル・孫ギャルが携帯使って援助交際なるものを営んでるそう。もちろん私らが学生だった頃は「夏休みに『不純異性交遊』しないように」とかナンセンスなこと管理教育くんと言われてたのもあんまりけど、援助交際で、そのオルタナティブとも思えないよね。もちろん援助するおやじらが問題ですが。

それととても重要なのは、電磁波で体が悪くなっちゃうってこと。飛行機の中でかければ墜落するし、病院でかければ死人が出るし、正しく使ってもだんだん発ガン体質になっていく。うーっ、これが便利ということなのか?

とにもかくにも、爆発的に普及し続ける携帯電話・PHS、一番儲けてる奴等は誰だ?損をするのはやっぱりエンドユーザーか?でもちょっと便利そうだなとも思ってしま

希望西から東から

犬も歩けば希望にあたる

小選挙区制なんかに負けないで、市民の政治をつくりましょう！

by小選挙区制をきっかけに行動を起こす・すぎなmix

毎回、各地の希望21の活動や市民運動報告などを行っている「希望西から東から」。今回は、おなじみですが東京杉並からの報告です。杉並では、来たる小選挙区制の下での初めての総選挙に、ハードルが高いのはわかっていながら、なんとか市民の声を政治に反映させようということで、市民派の女性区議を支えている人たちや、地域で連続講座を企画している人たちなどが集まって「小選挙区制なんかに負けないで、市民の政治をつくる会」をつくって、ここ半年間相談をつづけてきました。有志で「市民新党にいがた」の山田達也さん(新潟市議)を招いて話を聞いたり、先月報告したように、臨海副都心についての勉強会などをしてきました。そして、この7月、もっとアクティブに活動していこうということで、「小選挙区制をきっかけに行動を起こす・すぎなmix」と改称・再編して活動を続けています。(報告:つくり隊・菅原和之)

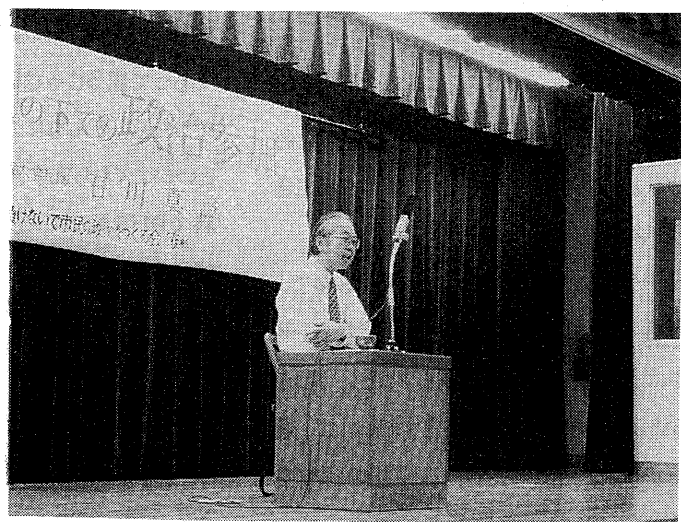
石川真澄さんを招いてシンポジウム開催

去る7月19日に、すぎなmixは、新潟国際情報大学教授の石川真澄さんを招いて、『小選挙区制の下での市民の政治参加』と題したシンポジウムを開催しました。石川さんは、今年3月まで朝日新聞の編集委員をしており、ジャーナリストの中ではほとんどただひとり小選挙区制について一貫して批判的な立場を表明してきた方です。

まず、主催者挨拶として杉並区議会議員の富沢よし子さんが、「小選挙区制は少数意見の切り捨てられるきびしい制度だけれども、あきらめないでなんとか関わって行けるようみんな考えていきましょう」と呼びかけました。100人の会場に35人しか集まらずちょっとさみしい気もしましたが、石川さんは主催に気を使って下さったのか、「このテーマでこれだけ集まればスゴイ」といって講演をはじめました。「主催の方のあいさつにもありましたが、経済界の一部では保守二党は面倒なので巨大な保守党がひとつあればいいじゃないかという声も聞かれます。いずれにしても、今度の選挙の後には、400人政党体制が登場するでしょう。いままでは、選挙区の中に複数の議員がいましたが、今度は一人しかいない。支持者にとっては一人しかいない議員が野党であることは大変に都合が悪い。だから『先生も与党に行ってください』ということで、自民党であろうが新進党であろうが与党になってしまうんです。お孫さん新党である鳩山新党も小選挙区制の中では日本新党のようなブームを起こすことは無理でしょう。また、小選挙区制の下で議員になった人たちは、なかなか選挙制度を変えようとはしないでしょ(発言は要旨)といったお話を前半で展開され、参

加者のほとんど「こりゃ展望ないわ」と思っていたに違いありません。後半で石川さんは「でも私は楽観主義なんです」と切り出し、「新潟県巻町や沖縄県の住民投票など議会制民主主義だけに頼らないで、住民が大切なことは自分たちで決めようという動きが高まってきた、これは前進です。また小選挙区制も粘り強く反対の声をあげ続けていくことで、変えていくことも可能でしょう」と話され、希望が湧いてきました。シンポジウムの参加者の半数が参加した交流会では、石川さんも交えて、和気あいあいと積極的な意見が多く出され、これはいけるな、と思いました。

永田町を中心に、政治家の都合で『解散』話がとりざたされています。時間がな—っ!ただ情報に振り回されながらも感わされずに、自治を民主主義を市民の手で上げていきたいですね。小選挙区制なんかに負けないで、市民の政治をつくりましょう!



講演する石川真澄さん

やったね!巻町 日本初の住民投票大成功! 住民の過半数は原発に反対を表明

1996年8月4日は、日本の民主政治の歩みに、深く刻まれる日になりました。原発の計画が持ち込まれてから二十数年。ようやく勝ちとった町長選挙、住民投票の実施まで、ねばりづよい運動をつづけてきた巻町住民に敬意と感謝を。これは、原発の賛否はもちろんのこと、政治の方向を決める主体は住民であるという、民主主義の基本的な形を現実のものとした、日本では稀にみる快挙でした。中央の行政方針や企業利益に誘導されずに、住民のまとまった意思表示が出せたというのは大したもの。仕組みと意識の両輪を作り上げ、バランスをとりながら前へ進んできた結果が、投票率88.29%という説得力ある数字に結びつき、うち反対12,478票、賛成7,904票という住民の判断を生み出しました。笹口町長がきっぱりと、「住民は判断する力があるし、その結果は町にとってはぜったいと言っていいほど尊重されるべきものだ」というのは極めてまっとうな発言だったけれども、権利を行使できる民になれるかどうか、やっぱりわれわれの側に問われている問題なのだと思います。使うからこそ権利として立ちあがり、民主という実態がうまれる。こんどの結果を重く受けとめ、それぞれの地域で元気を出し、運動のあり方についても生かせるものを汲みとっていきたいと思います。



市民新党にいがたの主張

7月に巻町を訪ねた折りに、新潟市亀田町にある「市民新党・にいがた」の武田貞彦さんの事務所にお邪魔し、こんど衆院選に立候補を決めた中山均さん、武田さん、ほかのメンバーに、これまでの経験の一端をうかがいました。面白かった議論の要旨を紹介します。

◆市民新党は、運動じゃなくて政党をやるんだ!の議論

市民新党は、自立した市民の横のつながりによって構成されるもので、指導部の拘束があったり、議員がエラかったりするわけではない。その活動は、政策の研究と立案、普及ど、その実現へ議員を送り出すための各種の選挙、そして議会活動である。党のメンバーは、党の活動のほかは、それぞれ市民運動や労働運動、さまざまな大衆運動にかかわっている。しかし、このパーティとして、個別の市民運動に肩入れしたり、口を出したりすることはしない。だから市民運動の人からは、「後退だ」と言われる。運動をやめて政治に行ってしまうのかとも言われる。が、市民運動と政治運動は、それぞれ異なるもので異なるやり方があり、補い合ってやるべきで、その点についてははずい

さて、開票当日の様。杉並では、7月にPARC自由学校の巻町エクスポージャーに参加した人を中心に、行きつけの飲み屋「バルト」に集まって、結果待ち。TVニュースに注目しつつ、オリンピックばかりでニュースに出ない!と巻町に電話してみたり、早くもお祝いの色紙を書こうか、などとヤキモキしているうちに、ようやく速報が発表(パチパチパチ!)。乾杯のビールが美味しかった。ノート型パソコンを使って各通信社のニュース速報ページを開いて見たのが、結構よかったです。反対派「圧勝」をしつかりと確認し、世の中捨てたもんじゃないよね、などと勢いづいて、巻町の住民団体には寄せ書きの色紙を、東北電力の社長には原発建設の計画を白紙に戻すよう、電報を書きました。



ぶん議論した。結果、私たちは政党結成に至った。市民運動のネットワークではどうか、という活動家がいるが、市民運動の要求の実現のためには、法制度や現状の政策変更が必要な点が多く、政治、社会の在り方のそのものに原因がある。市民政党というからには、「社会の主人公たる市民の政治に責任をもつ」役割をみずから問うわけであって、市民運動か政治運動か、ということではなく、既成の政党にたいする批判と全面的な変革の必要性という意味から、政治に責任をもてるわれわれの組織をつくることにした。政党には政策がある。勉強をして政策を提起し変更する力をもたなければならない。その政策の現実的な実行には責任をとる覚悟も必要だ。そして私たちの政策を広く人々に伝えることで、地域の人々の理解を得なければならないし、選挙に勝って議員を出さなければならない。政治のことは、とりえず「革新政党」にたよってきた結果が、今の日本の政治だ。政治を「しよせん汚い権力争い」にした私たちの責任を、長期的に変えるプログラムが必要なきにきていると思う。政党は、大衆組織とは独自の組織として自立すべきで、特定の団体や財界のヒモ付きでは困る。人々から支持される政策づくりを進めるために、現在は、月に1回さまざまな社会問題をとりあげて市民と共に学習・研究する公開の場「市民塾」を開いている。その場の学習を受けて、試案やシミュレーションをつくり、毎回政策集としてまとめながら、市民新党にいがたの政策を作っている。(1996/7/13 談まとも/花崎)

編集後記

アスリートの輝きに拍手を！
商業偏重主義と環境破壊に鉄槌を！

近代オリンピック100年、史上最大の規模で行われたアトランタオリンピックが先日終了しました。はつきりいって私はけっこう感動しました。年をとるごとに涙もろくなるのか、特にラストの男子マラソンでアフガニスタンの選手が負傷している足を引き摺りながら4時間以上かけてゴールしたときには涙がポロポロでました。アフリカという地域をものすごく意識できる機会でもあることはオリンピックのいいところだと思いました。

だからといって、オリンピックには、今回の爆弾テロ事件をあげるまでもなく常に負の部分に伴います。むしろ負の部分の方が多いかもしれない。開催地を改める度になされる環境破壊。今回のアトランタでは特に顕著だった商業偏重主義。放映権のある会社本意で競技の開始時間さえ左右されてしまいます。また絶えないドーピング。金に糸目をつけなければドーピング検査で陽性にならない興奮剤も開発されていると聞きます。またIOC周辺に関わる利権の構造。オリンピックの負の部分には躊躇わずNOといたい。だけどアスリートの輝きに感動する心までは失いたくないと思います。日本選手の中では、女子10000Mの千葉選手が気に入りました。インタビューでこう言います。「わたしもいるんだぞ 一つてことを世界のみんなにアピールしてみました」

(ニヨキ)

希望の21世紀宣言

私たちは、現在のモノ中心の社会を、人間が人間らしく生きることのできる社会へとつくり変えていくことをめざします。

人間らしい社会—人と人が平等に、ともに助け合って、人間が自然の一部として本来の姿で生きることのできる社会—を実現することこそが、人々の希望です。私たちはそのために、あらゆる領域で民主主義を徹底し、民主主義をばむものに対してたたかいます。

私たちは、世界に戦争と大国主義の不平等をもたらす憲法改悪を許しません。9条の理念の実態を日本からつくっていくことによって世界の平和と民主主義の実現に貢献していきます。国と国とが対等平等の関係にあり、人間らしく生きることを豊かさの尺度に、人々のあり方を人々が決め、どこの誰もほんとうに武力を必要としない国際社会の実現こそが、平和の実現です。

私たちは、地域からの国の進路、世界の在り方を決定する政治的な力をつくっていきます。そのために、私たちの意思、知恵や力を結集したがいの経験に学び合い、信頼を築き合いながら、自治の実現をめざします。何かに頼ることなく広範な人々とともに、変革の力をつくり、その統一を推進することを自らの役割とします。

世界の現実を変えること—それは私たち自身のありかた、運動の在り方を変えることなくしては実現できません。私たちは自らを変えあうなかで、現実を変革していきます。本音を出し合い、あらゆる困難をともに克服し、成功や喜びを、そして失敗や悲しみをも共有し、助け合ってたたかいの輪を広げ、そのなかに新しい社会を準備していきます。

人間らしい社会の実現をめざし、世界の平和と民主主義を求める人々とともに、希望の実現に向けて進みます。

1部 200円 定期購読をよろしくお願ひします！

年間購読料 3,000円(送料込み)

郵便振替:00100-1-97125『希望の21世紀』

月刊『希望の21世紀』●創刊10号●1996年8月15日●

発行●「希望の21世紀」全国調整委員会 編集●希望21・未来はみんなで作る隊

連絡先 ●希望21・三多摩

東京都日野市多摩平6-20公住219-5 三浦方

TEL&FAX 0425-82-2407

●希望21・京都

京都府京都市中京区丸太町通柳馬場西入る鍵屋町75 東陽ビル3F COM 京都気付

TEL 075-212-2455 FAX 075-212-2456

●希望21・未来はみんなで作る隊

東京都杉並区高円寺北3-22-8 大一市場208 菅原方

TEL 03-3310-4553 FAX 03-3223-0468

●希望21・神戸

兵庫県神戸市灘区森後町2-1-9 斎原ビル302 江口方

TEL&FAX 078-843-7626

●希望21・大島

東京都大島町元町字小清水273 尾形方

TEL 04992-2-4708

希望
21
century